

豆の町（ビーンタウン）から

こんにちは（第14回）

会員家族 住井 円香

■大ヒット「ズートピア（2）」

ではなく（1）のお話

昨年暮れ、冬休みのため、日本に帰省する際の飛行機で映画「ズートピア（1）」を観ました。現在続編が公開されてアメリカでも大人気なのですが、そもそも10年前に公開された1作目を観る機会はなかったもので、周囲によりやくほんの少し追いつくことができた気がします。

かわいい動物たちの作品なので、テーマもライトなもののかと思っていたら、思いのほか現実の人間社会を正確に反映した映画であることに驚きました。主に肉食動物で構成する警察の世界。そこでウサギで初警察官となった主人公の存在は、人種や性別などで差別されてきたグループが、壁を乗り越えてきたことを想起させます。

多種多様な動物たちが暮らす大都市・ズートピアなのですが、誰もが親しく暮らしかうわけではなく、実

際にはいくつもの同じ動物たちが固まって生活し、むしろ互いへの偏見に満ちた世界であるという描き方も、人種のサラダボウルといわれながらも、異なる人種同士の相互理解が限定されたものであるアメリカ社会に似ていると思いました。

中でも印象的だったのは、差別の描き方です。食物連鎖の上位として存在してきた肉食動物は、映画ズートピアの中でも差別をする側として当初は設定されていますが、社会の変容によって、彼らもまた、特権は持ちつつも、偏見の被害者にもなりつつあるという様子が見えてきます。肉食動物を凶暴な存在として、その立場を奪おうとする草食動物たちは、外見である身体的特徴からはみえない内面のところに危険性を秘めている点も、現実社会と重なるように感じました。

弱者であっても、社会的に強いとされる存在であっても、凶暴性は誰もが持っているという映画のメッセージは、正義のミカタが悪を倒すというディズニーの従来作のシンブルな構造を覆している点も興味深かったです。また、単に現実を写實的に投影し、悲観的に描くことにと

どまらないところはさすがでした。特に、主人公が歌ったり踊ったり安易に魔法の力を借りるのではなく、残酷な世界の側面に直面しながらも警察官として成長していく姿は、夢は叶う、というディズニーの精神性も、既存の作品と異なる形で体現しているように感じました。

■いろいろな緑がいつぱいのオレゴン州
冬休みを終え、大学のあるボストンに戻る前に、西海岸北部・オレゴン州に住む大学の友人宅を訪れました。羽田空港からサンフランシスコを経由して、ポートランド国際空港へ。空港からは出迎えてくれた友人が自宅まで運転してくれたのですが、車窓から高速道路沿いに見える青々と茂る木がたくさんあり、驚きました。冬にはほとんど葉が落ちてしまうポストンの街路樹とは異なり、オレゴンには様々なタイプの木があるため、寒い時期でも葉が残っている木も少なくないと教えてもらいました。

到着翌日にはワシントン州との州境、コロンビア川峡谷にあるマルトノマ滝に連れて行ってもらいました。オレゴン州には数多くの滝があるそうなのですが、その中でも最も

高く、一年中水が流れている滝としては、全米で2番目に高いところなのだそうです。周辺にはいくつかハイキングができるコースが存在し、私たちは滝の一番上まで行く片道1・9 kmのコースを登りました。滝の水量が多く、滝の中間部にかかる橋ではしっかりと水しぶきを浴び、前髪がびっしり濡れてしまいました。

道中は木の実が成っていたり、東海岸ではほとんど見かけることがなかった苔が、いたるところに生えていました。オレゴンの学生は遠足の度にこれら多様な植物の名前などを学ぶそうです。友人はハイキングを楽しみながら、都度解説してくれたのですが、ほとんどアウトドア経験がない私は体力があまりもたず、残念ながら植物の名前や植生についての内容をほぼ覚えられませんでした。合間に多くの休憩を要した私に「時差ボケだから仕方がない」と理解を示し、忍耐強く付き合ってくれた友人に感謝です。

昼ご飯は、ポートランド市中心部のキッチンカーで購入しました。目玉焼きとベーコンの載ったサクサクのワッフルがとてもおいしかったです。

す。他にも寿司やメキシコ料理などのキッチンカーがあったのですが、寿司のキッチンカーは衛生面が大丈夫なのか、若干気になってしまいました。

その後、友人の幼馴染たちと合流し、ポートランド日本庭園を散策しました。東京農業大学の戸野琢磨教授によって設計されたこの庭園は、「日本国外で最も美しく、本格的な日本庭園」とうたっています。しながら友人たちは、「アメリカにあるどの日本庭園もアメリカでもっとも本格的だと主張している」と笑っていました。オレゴンでは前述したように苔がなじみ深いようで、友人たちは日本庭園の苔を見るたびに、「地元に戻ってきた感じがする」と感慨深げでした。

日本庭園を後にし、近くの樹木園を1時間ほど散策しました。こんなに緑に囲まれた一日を過ごしたのは、小学校の林間学校以来のように感じました。アメリカ人は自然が好きで、自然を楽しむことが好き、という印象はあったのですが、都市圏であつてもそれほど遠くない場所でダイナミックな自然とその迫力を満喫できる場所があるのはうらやまし

くも感じました。

「休む」ということをしっかりとエンジョイする。そんなアメリカらしい冬休みを友人と過ごすことができましたが、平穏な日常生活とはあまりにも対照的なさまざまな出来事が頻発しています。現在、アメリカでは移民税関捜査局（ICE）職員による銃撃事件などはじめ、連邦当局が関連する銃撃事件が相次いでいます。こんな自然豊かなポートランドでも、私が渡航するほんの数日前には国境警備隊員が男女2人を銃撃、友人宅でもご家族が不安を口にされていました。

中南米にルーツを持つ友人の中には、新年早々に起きたベネズエラ攻撃を批判する記事をインスタグラムで引用している人もいました。前ベネズエラ政権への是非よりも、対外的に強引な手法を推し進めることへの抵抗感を示しているように見えました。ただ、ICE職員銃撃事件のように、周囲のアメリカ人の意識は、国外よりも国内情勢に対する不安感が強いように感じます。平和で豊かな自然で過ごした時間と、あちからこちらに緊張感があふれる現状の対比に少し戸惑いも覚えました。